報　告

中国における舞踏の現状

原　一平

舞踊学会の非会員である筆者に標記の演題が与えられたのには事情がある。日本大学から1989年3月に約1週間，同年11月から約3ケ月，中国における研修出張を許可されたので，2度にわたり北京市を訪れる機会があった。その内，89年12月には北京で当学会の目代清先生とご一緒させていただき，多くのご教示を賜った。その折，舞踊学会における講演をお勧め戴いたのである。

ただ，上記2度にわたる筆者の訪中の目的が，京劇を中心とする古典劇の現状調査と，中国における演劇教育の実態調査であったために，現地の舞踊を系統的に見てきたわけではなかった。また当学会の会員ではない筆者は舞踊に関しては浅学非才，第一から「舞踊」と「舞踏」がどのように異なるのかという知識が有るわけでもない。(日本人が使う「舞踊」に当たる言葉が中国語の「舞踏」であるということは訪中時に認識できた。例えば「歌舞伎舞踊」「日本舞踊」は「歌舞伎舞踏」「日本舞踏」と訳される。中国研究家や両国留学生の多くが利用し定評のある大修館書店『中日大辞典』には「舞踊」の語は見当たらない。「踊」の字もあるにはあるが，この字の項目にはわずか2単語が示されるのみである。なお「舞」の発音wǔが「武」と同一であることは中国の舞踏を考える時のヒントになるかも知れぬ。)

しかしながら，京劇に代表される中国古典劇における動作は甚だしく舞踊的・様式的要素を含むものであることは言をまたない。以上の理由から標記演題の主旨に外れることを承知で，京劇ほかの古典劇に関して筆者が得た知識の一部をここに報告することとした。

京劇の源流の一，安徽省の徽劇が1790年に北京で公演を行い，その後同地に残留，これが今日までの京劇伝承の発端とされる。このため1990年を「京劇200年」と名付けた企画が89年あたりから盛んに行われている。『京劇200年概観』『中国京劇史』等の出版，「徽班進京200周年記念京劇公演」(90年12月～91年1月，北京市内各劇場で計51公演)などの企画である。「京劇200年」の謂が最近とみに習慣付いてきたと言える。

日本人は，「京劇」の意を「北京の劇」と捉えがちだが，京劇は1840年頃その様式を完成させると全国に流布，各省で行われるに至る。即ち「○○省京劇」という言い方が現在でも行われている。この例は多数あり，例えば四川省で成立した「川劇」が隣省の貴州・雲南でも行われるといった具合で，こうした劇種の膨大な拡がりが中国古典劇の鑑賞と理解を興味深いものにしている。

古典劇の劇種数については諸説があるが，筆者は，中央戯劇学院（1950年創立の国立演劇大学。多くの卒業生を演劇界に送り出し，中国演劇教育の中心となっている）の黄維若教授から以下の教示を受けた。

1962～63年に行われた文化部（日本の文部省に当たる）調査によれば，中国全土で伝承される古典劇の総数は319劇種，劇団数は1986年調査によれば4,000以上に上る。(この調査には，公立以外の「民間劇団」は含まれていない。民間劇団は革命前の農村芝居がそのまま残った例が多く，筆者が訪れた福建省では，この種の劇団が同省だけでまだ200以上残存していると聞いた。)

古典劇人口については調査さえ困難で確定された数字がなく，最も少ない報告で25万人，最も多い報告で100万人という，まさに質，量ともに驚愕すべき数字を知ることができたのである。

この古典劇の世界に「梅花賞」と称するコンクールがあることを知ったので，報告の最後に述べておく。1983年中国戯劇家協会（実演者・研究者による全国組織）主催で始まったこのコンクールは毎年秋に北京で行われる。対象は全国各地の古典劇・新劇の45歳以下の俳優で，一度以上北京で上演を終えた演目が改めて舞台審査される。(経済機能の一部が上海に置かれるものの，中国の政治経済文化全ての機能が首都北京に集中しているというこの国の特質を考えれば，地方劇団にとって首都における公演とその評価が重要な意味をもつことを発見できる。「一度以上北京で上演された演目」という条件もこの事実をうけていよう。)

受賞者の定数は毎年最大22名で，内訳は古典劇15名，新劇5名，オペラ2名。32名の審査員が22名を連記する方法で投票が行われ，過半数17票以上を獲得した俳優が受賞する。

この賞のシステムには日本の類似のコンクールが学ぶべき点が多いように思われる。審査員には投票に先だって観客によるアンケート（中国戯劇家協会機関誌「中国戯劇」の読者投票）の結果が配布される点が第一。第二が副賞の大きさである。社会主義国家の特質と言ってしまえばそれまでだが，副賞として住宅が与えられるという点が，この賞を極めて名誉あるものとしている。筆者も数

度にわたりコンクールの対象となった公演をみたが，平素に比べ明らかに観客数も多く，主役にこの賞を獲得させようとする熱気が端役や伴奏者の一人々々に見受けられ，極めて質の高いものが多かった。その意味でこの賞が中国演劇の水準を間違いなく底上げしている点を最後に挙げておく。

＊1990年度春季第29回舞踊学会
『舞踊學』第13号より転載